

心がこもっていない

筑波大学化学系 河島拓治

私の勤めている大学のアイソトープセンターに関わって数年、その間学生、教職員の放射線業務従事者新規講習会での実習を見学する機会が何度もありました。実習は二人1組で、一人がゴム手袋をはめて実験し、もう一人が記録するようになっていました。ところが、ここでは驚くべき光景が見られるのです。R Iで汚染された（実際は大丈夫）ゴム手袋のままでガイガーカウンターの切り換えスイッチをひねる、テキストを持つ、ボールペンを掴む。このままではドアの把手をも掴み兼ねません。手袋をはめると自分の手は汚染されないことは解かっても、ガイガーカウンター、ノート、ボールペンが汚染することには思いが及ばないようです。当然のことながら教職員にはこのような人はいないことは言うまでもありません。それを見て思いだしたことがあります。

昔、大学院の学生だった頃、お寺に下宿していたことが縁で、お茶を習ったことがありました。もちろん私一人ではなく、同宿の理系、文系の学生から社会人までが月1回土曜日の夜に楽しく、そして真面目に習っていたのです。座り方から入り、茶筌、袱紗の使い方、お茶の勧め方、飲み方、茶碗の誉め方まで習いました。夏と冬では道具立てが違うことは驚きでした。同門の中で一番覚えの早かったのが、何を隠そうこの私だったのです。それは実験の要領で、所謂Tea Chemistryをこなしていたのです。そして文系の人達の何と要領の悪いことか、と密かに自惚れていました。ところが、あるときお師匠さんの講評がありました。お師匠さんは御住職の実姉で別のお寺の尼様でしたが、いつもは優しいお方なのに、講評のときはそれはそれは厳しいものでした。”さて”、とおっしゃって真っ先に私の方を向かれました。”さすがに理系の、それも化学をおやりなだけに、他の誰よりも覚えが早いようです。けれど...”と続きました。”けれど、心がこもっていませんね”。晴天の霹靂というほどでは有りませんがショックでした。そして深く反省したことは言うまでもありません。お師匠さんの講評はまだ続きます。”何かをする時、形だけではいけません。その動作は何を表しているか、どのような意味があるのかを考えなければいけません。化学の実験もそうでは有りませんか”と。

最近の機器分析の進歩は目覚ましいものがあります。フローインジェクション分析法（F I A法）の発展も言うまでもありません。F I Aに限って言えば個人差もあまりなく、反応管の長さで反応時間を、流速で試薬の量を、フロー系の組方で試薬の添加順序を設定できるし、色々な温度での反応も自由自在です。けれども、忘れてはならないのは、そこで行われている反応がどのようなものであるかをしっかりと掴んでおくことだと思います。方々で言われていることですが、機器分析を行う場合でも感度には自ずと限界があり、それを克服するには新しい化学反応の創案を心掛けなければならないのではないのでしょうか。新しい反応系の開発、新しい分析法の開発があってこそ、F I Aの長所を最大限に引き出すことが出来るのではないのでしょうか。そのためには、バッチで十分な習練を積み、反応を理解した上でF I Aをはじめ多種多様な機器を使いこなすということが最良ではないかと常常考えているところです。